

特集 「大阪湾岸と淡路の地域史研究」の刊行にあたって

ひようご歴史研究室に「大阪湾岸と淡路の地域史研究」班（大阪湾岸班と略称）が組織されたのは令和四年（二〇二二）度からであるので、活動期間は、わずか三年に満たない。それにも関わらず、ここに特集号を編むにはいくつかの事情が関係している。なにより本年度末を以て、ひようご歴史研究室が閉鎖されるという事情である。それは偏に予算の減少に起因しているが、その真因は、研究室の設置が条例でなく、単年度予算による事業推進という制度設計に始まったからである。したがっていつかは終わることが宿命づけられ、それが一〇年目になった、ということであるが、わたし自身もその分、年老いた。最盛期に三班で三〇名程度いた研究員の中にも、定年を迎える人が続いている。世代交代期に入っているのである。ならば、一つの区切りとして受け入れよう。

したがって何も、悲観することでもない。「一〇年ひと昔」——その間にどういう成果があったか、残された課題は何か、などをひようご歴史研究室として整理するチャンスである。本誌の発行も、間違はなくその一環である。

さて大阪湾岸班は、先行した『播磨国風土記』研究班の後を受けて始まったが、その交代の前年に出版された『播磨国風土記』の古代史』（神戸新聞総合出版センター、二〇二二）は、ニュージールランド在住の日本文学研究者パーマー先生 *Edrina Palmer* によって全文英訳され、今年度から当館のホームページに掲載されている。全くの無償で、当該研究の水準の高さを世界各地の日本研究者に伝えようという純粋な学術的意思にもとづく行為である。

さらにパーマー先生が著した『播磨国風土記』の英文 *Harima Fudoki*（二〇一六、オランダ・ブリル社）は、『播磨国風土記』研究班の成果と相まって、『風土記』研究の国際交流を促していた。それは昨年一二月、

研究室一〇周年記念として開催した国際シンポ（オンラインも含む）に、イギリス・オランダ・ニュージーランド・イタリアなど、諸外国からの参加があったことに示されている（詳細は138頁以降を参照）。こうした『播磨国風土記』研究班の成果を継承しながら、大阪湾岸班が始まったが、その前提となったのは、平成二八年（二〇一六）に認定された日本遺産「国生みの島・淡路」の事業を進める淡路市・洲本市・南あわじ市三市の教育委員会、なканずく文化財担当部署との連携である。

その後さらに、令和二年度（二〇二〇）に始まった「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトが加わることで、大阪湾岸班はとりわけ淡路の歴史研究に注力することとなった。そこには減少する予算を、事業を受託することで補いたいというやむを得ない事情もあったが、ひょうご歴史研究室としては、大阪湾岸班と「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの二つの研究チームが共同して取り組むことで、限られた期間内に成果を出す、という狙いがあった。

令和二年度に始まった「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトはコロナ禍を経て四年度末に、報告書『鳴門の渦潮』と淡路島の文化遺産』を出して終えた。引き続き五・六年度に第II期がスタートし、ここでは淡路島の文化的景観をテーマとした。「鳴門の渦潮」という類まれな自然現象のもと、「国生み」神話以降、淡路島で人は、自然とどう関係をもちながら生活し、歴史を築き、現在に至っているのか、その歴史的な遺産を「文化的景観」として整理しよう、というのが目的である。そこで最大の資料となったのが、一九世紀初めに作成された「淡路国分間地図」という平面図と、『淡路名所図会』という景観図である。

前者は淡路島内に散在していたモノを、三市と協力して調査し、一〇〇点を超える地図が確認された。一八〇〇分の一という縮尺の大きさは、それによって「地面に刻まれた歴史」を読むのに最適である。ただし人権上の問題に考慮して、その利用は当研究チームの学術研究に限り、将来に向けては当該市教

育委員会の下で、厳正に保存・管理されることが望まれる。

他方、『淡路名所図会』はわたしたち歴博が所蔵するモノで、日本を代表する近代南画家直原玉青氏の寄贈品である。島内全域の山と海・寺院と神社・村と町・古城跡などを描いた二〇〇点を超える絵図集で、鳥瞰図であることから、いま流行りのドローンから地上を眺めた印象を与える優品である。研究事業と並行してデジタル化を進めたので、近い将来、公開されることとなるだろう。

あわせて現地調査においても、顕著な成果があった。それは沼島漁業協同組合と南あわじ市沼島地区公民館の協力の下、沼島に本格的な調査が入ったことで、明治以降の漁協文書については、「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの報告書に収められ、蜂須賀氏が沼島に与えた制札の再発見については、本誌に収められている。

もうひとつ現地調査がもたらした成果は、大阪湾に続く瀬戸内海と紀淡海峡から伊勢・東海地方に到る海域世界について、新しい知見が増えたことで、それは一月末に開催されたひょうご歴史文化フォーラムで取り上げられ、参加者に感銘を与えた。パネリストとして館長菱田哲郎氏など兵庫県立考古博物館のメンバーが参加し、会場を兵庫津ミュージアムとするなど、県立の歴史系博物館関係者が勢ぞろいするという画期的なフォーラムであった。

ひょうご歴史研究室には、県と市町の文化財関係者が歴史遺産を通じて交流する場であること、日本の社会の歴史的研究の二つの方法、文献・古文書研究と埋蔵文化財・考古学研究の双方が交流する場であること、の大きな二つの課題があった。この一〇年の間に、それらがどう進められ、どこまで実現できたか―それについてわたしたちにはかなりの自負があるが、最終的な評価は、後日に任せたい。ひょうご歴史研究室設置から一〇年、歳月は無駄には流れていない。

本誌は、以上述べた経緯を背景に編集されたもので、とくに第Ⅱ期の報告書『「鳴門の渦潮」と淡路

島の文化的景観』と対になっている点に特徴がある。ぜひとも、その点に留意していただきたい。

最後に寄稿いただいた各氏にお礼を申し上げたい。とくに歴史遺産活用のコナーに玉稿を寄せていただいた西播磨県民局には、これまで「赤松氏と山城」研究班と連携・協力していただいたが、わたしたちが関与した歴史遺産活用事業としては格段に顕著なものであったことを一言、付記したい。

平成二十七年（二〇一五）に始まったひょうご歴史研究室の諸事業に、一〇年もの間、ご支援・ご協力いただいたすべての皆さんに、衷心からの謝意を表します。ありがとうございました。

令和七年（二〇二五）三月

兵庫県立歴史博物館長兼ひょうご歴史研究室長

藪田 貫